

これでいいのか日本の銃規制

ストップ・ガン・キャラバン隊代表 **砂田 向壺さん(61)**

佐世保のスポーツクラブ乱射事件で、伝えられた犠牲者の一人の葬儀は、長男敬さんを失った十四年前に自身を引き戻した。



「今年若くは若い人相手に議論を広げる企画をやりたいたいです。やはり国民全体の盛り上がりがないと」。銃のない社会の実現に向け、新年にこう期した。

二〇〇七年は無念の一年だった。長崎市長の射殺、猟銃による隣人殺傷、暴力団抗争の果てに病院患者の人違い射殺、そして年末、長崎県佐世保市では「まさかわが国で」と誰もが驚いた散弾銃乱射。「偽」と総括された年は、「銃」も際立った。新聞やテレビへのコメント、講演が多いことに「僕らが忙しい現状はおかしい」と嘆く。



「息子を失ったトラウマは消えない。それを抱えて、ずっとやっていかないと」。福岡市の自宅には、敬さんの遺影と、遺品の中にあつたボクサーの写真などが飾ってある

許可責任強い自覚を

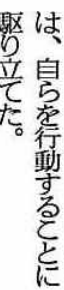
焼き場と重なって。火葬の罪を閉めるとき、あれを思い出して。僕はもう、な

「今年若くは若い人相手に議論を広げる企画をやりたいたいです。やはり国民全体の盛り上がりがないと」。銃のない社会の実現に向け、新年にこう期した。

その同意へのサイン、司法解剖、日本への搬送、福岡での葬儀、マスコミへの対応。つらい日々の中で、ほとんど犯人が分かった。敬さん

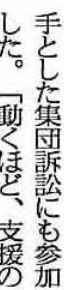


翌九月、ニューヨークを再訪し、友人知人の助けを受けて、検事出身のジュリアーニ・ニューヨーク市長との面会が実現。迅速な裁判への協力の約束を得た。また、ワシントンでは銃規制を求める活動「サイレン



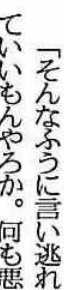
んと同じ団地の別棟に住む二十歳と十九歳の二人組だった。「起訴状を手に入れ、息子の最期を知りたい」「犯人の責任追及を見届けたい」。そう願っても、現地の日本総領事館のサポートは鈍い。「一矢を報いたい。敵を取りたい」。その一念は、自らを行動することに駆り立てた。

当時、米国内での銃の犠牲者は年間三万八千人。留学などで滞在する日本人の犠牲も続いた。ハロウィーの仮装姿のまま、間違っ



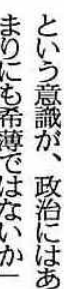
ト・マーチ」にも参加し、「息子は戦争にきたものではありません。でも」と、銃社会の異常さを訴えた。十月にはクリントン大統領領から望外の返信が届き、お悔やみとともに銃規制の強化の表明などが書かれてあった。銃器メーカーを相手とした集団訴訟にも参加した。「動くほど、支援の輪が広がるのを感じた」

国内には、許可された銃が三十万丁ある。「月一万円徴収すれば、年間三百六十億円。厳重な保管や犠牲者を支援する基金もできる」という。銃のプロの警察官や自衛官は、使用のたびに日時や弾数を記録管理する。でも、銃は使用者の良心に任されるのが現実だ。「合法適正だから責任がない」という神経である限り、「事件は再発する」という。その言葉は重い。



佐世保の乱射は米国内で相次ぐ凶悪事犯と重なるばかりでなく、わが国の「銃の所持許可」そのものに疑問を投げかけた。散弾銃と空

て訪ねた家の家主に射殺された服部剛丈君（当時高校生二年）もその一人。服部君の両親もともに行動し、九五年秋には、犠牲者の遺族らでストップ・ガン・キャラバン隊を結成。銃規制活動に取り組んできた。



「そんなふうに言い逃れたいいもんやろか。何も悪まにも希薄ではないか」

いこととらんに殺されとつとですよ。遺族は怒りをどこにぶつけたいのですか。（容疑者が自殺し）誰の責任も問えんなら、死んだ者は浮かばれん」

文・写真 編集委員 佐々木政文